

文化

東日本大震災の被災者に向けて料理を教える先生がいると聞き10月13日、宮城県仙台市太白区にある仮設住宅を訪問した。講師は仙台市ガス局の料理教室でも講師として活躍する河合伸子さんだ。

仙台駅から南へ約5km、車で15分ほど走り、商店街や住宅地から少し離れた場所に「あすと長町仮設住宅」がある。4月末、市が都市再生機構の再開発地区に第1次仮設住宅として223戸を完成させた。沿岸地域の荒浜や福室地区で津波に



仮設住宅の集会所



会話しながら料理をする河合さん



盛り付けは全員で

被災者を支える料理教室(仙台市)

料理で元気になりましょう

こんにちは」と、エプロン姿の参加者が集まった。献立は、枝豆(ぼん)、きのこ汁、鮭と鶏肉の黄金焼き、白コメのフランマンシエの4品。

枝豆(ぼん)から作り始めた。河合さんは調理を進めながら参加者に元気づけようとする。「塩は少し。薄味にしましょう」「両手を使って脳を活性化」。「きのこ汁は片栗粉でとろみをつけましょう。冷めにくくて体が温まるのよ」。参加者の中には震災前、ガス局の河合さんのクラスに参加していた人もいて、涙ぐむ場面もあった。

料理を終えると、集会所にテーブルといすを並べて試食する。「みんなで作ると料理って楽しいね」「この前作った練り味噌はおいしかったからすぐ作ったよ。こはんのおかずになるし、役に立つね」。温かい料理を食べながら会話が弾む。知り合いが増えたと話す参加者もいた。

11月4日には、被害が大きかった名取市の「箱崎屋敷仮設住宅」で、14日には「あすと長町仮設住宅」で3度目の料理教室を開く。寒くなってきたので体が温まるメニューを作る予定だ。

メーカーも協力

河合さんは徳島県出身で結婚後、仙台市に住んでいる。料理教室の講師・料理研究者として31年携わったベテランだ。世界を旅して料理を勉強し、

様々なレシピを練り出す。テレビやラジオ、料理本の執筆など幅広い分野で活躍する。

被災者のために何かできないかと考え始めたのは4月。人手が必要な炊き出しは継続が難しいと考え、料理教室をすることに決めた。8月に、市が運営する震災復興室が相談の窓口だと分かった連絡をとった。その後、あすと長町仮設住宅の事務所へ相談して料理教室の日程を決め、ボランティア登録をして準備にたどり着いた。

告知は自作のポスターを集会所の外壁に貼ったほか、ちらし、ホームページを活用した。仙台市ガス局の協力で、リンナイの「デリシア」を借りその都度設置してもらった。ピルトインコンロで集会所は料理教室らしい雰囲気になった。また、フランスの有名調理器具メーカー「ル・クルーゼ」の協力もあり、カラフルな鍋や調理器具がそろった。食器までは準備できなかったが、紙皿でも食事を楽しめるような盛り付けを指導した。

河合さんは「仮設住宅の方々は避難所生活や物資の不足で料理をする環境から離れていた人がほとんど。気持ちが落ち込んで食事を作る元気がない人もいる。料理することにおおっくうにならないで、楽しみに少しでも触れてほしい」と話した。(上田 美季)



より家を失った人たちが入居する。平屋造りの四角いプレハブ住宅は1DK(K(6坪)、2DK(9坪)、3K(12坪)の3タイプ。台所、トイレ、風呂、照明、エアコン、カーテン、ガスコンロが設置され、供給エネルギーは都市ガスである。

キーは都市ガスである。即席のキッチンで集会所もプレハブ造り。外壁にはたくさんのポスターが貼ってある。お茶会や音楽会など様々なイベントが行われているようだ。中に入ると20

畳ほどのカーペット敷きの部屋があり、料理教室の準備が始まっていた。キッチンは即席。仙台市ガス局の職員が開始前にガスコンロを持ち込み、折りたたみテーブルとつなげて調理台にした。スタッフは講師の河合

さんら3人に、東京で料理雑誌の編集をしている娘の河合知子さんを含め4人。知子さんは仕事を休んで手伝いに来た。受講者は仮設住宅の住民14人。全員女性で50代〜70代が中心だ。午前11時のスタート前、「先生